

9. 下吉野とお講

矢崎 恵

- I はじめに
- II 下吉野の浄土真宗の行事
- III 在家のお講
- IV おわりに

I は じ め に

北陸は浄土真宗の盛んな土地である。特に鳥越城を中心に、その一帯は一向一揆の激戦地として知られている。そのような背景もあってか、この下吉野でも、様々な浄土真宗の行事が行われている。その中でも興味を引かれた行事は、各々の家に村の人々が集まって開かれる、在家のお講があるということである。在家のお講は月3回は必ず行われる。このような習慣が古くからあり、また今も引き続き行われていることは、非常に興味深い。

そこで本稿では、下吉野で行われている浄土真宗の行事を、在家のお講を中心に記述し、そのお講の持つ意味を考えてゆきたいと思う。

II 下吉野の浄土真宗の行事

下吉野で現在行われている浄土真宗の行事は、寺を中心に行われているものと、主に在家の人々によって行われているものとがある。表-1では、行事が行われる場所別に示す。

表-1 下吉野の浄土真宗の行事

1 月	1 日	修正会	5 日	年頭お講	27 日	豆お講	願 慶 寺
2 月	5 日	5 日お講					
3 月	11 日	御堂お講					
4 月	11～20 日	永代経	24～25 日	蓮如御忌			
6 月		大谷婦人会の講話					
7 月	1～10 日	永代経					
8 月	12 日	忠魂碑の慰霊	15 日	戦没者追悼法要	21～31 日	永代経	
11 月	18～19 日	報恩講	22～28 日	御正忌報恩講			
12 月	22、28 日	総お講					在 家
毎 月	12、27 日	月並お講					
毎 月		御書様お講					

1. 寺の年中行事

寺で行われる主な行事の内容は以下の通りである。

・修正会

1月1日の朝6時からお酒を振る舞う。下吉野、上吉野の門徒が対象。5日の年頭お講も同様のことをするが、対象は下吉野だけである。

・豆お講

各家から豆を集め、その豆を寺で煎って、参詣した人に振る舞う。

・御堂お講

河内村の江津と福岡が交互に主催者になって行う。地元の人も参詣する。

・永代経

正しくは「永代祠堂経」という。亡くなった人にお経をあげる日のことで、1回に10日ずつ、3回に渡って行われる。亡くなった人の命日に当たる日にお参りをする。説教をするのは寺の住職ではなく、外から招いた講師が行う。新規に参った人には「おとき」をだす。現在のおときはレストランの食事券である。

・蓮如御忌

蓮如上人お手彫りの木像があり、その前でお参りをする。

・大谷婦人会の講話

下吉野と上吉野を合わせて、60名位が大谷婦人会に入っている。講師が来て説教をする。

・報恩講

浄土真宗で一番大きな行事である。朝、昼、夜と説教がある。以前は参詣者は下吉野の人だけではなく、鳥越村、尾口村からも集まり、夜店が国道までにも広がっていたという。

・御正忌報恩講

11月22日から28日にかけて行われる。27、28日にはぜんざいを食べる。これは親鸞上人が小豆を好きだったからである。使われる餅は、報恩講の時に供えた餅であり、それをさげてぜんざいにして食べる。しかし昨年から、餅に黴がはえるため、報恩講のときの餅はその場で配ってしまい、27日に新しい餅を供えて、それを用いる。

下吉野で行われる、寺を中心とする行事の舞台は、集落内に位置する願慶寺である。願慶寺は、泰澄大師が白山開きに來たときに開いたというのが言い伝えだが、実際は1750年～80年にかけての本願寺と織田信長が戦った石山合戦に際し、教如上人が諸国を流寓したときにここに隠棲したことから、その少し前から存在していたと考えられる。下吉野にある唯一の寺であり、下吉野と上吉野の全戸がこの門徒であり、門徒数は約120戸である。明治時代末頃までは、この地域の総道場だったが、下吉野と上吉野が地元の寺を維持しようとしたこの門徒になり、道場から寺に格上げになった。

2. 在家のお講

在家のお講と寺で行われる行事とは内容的にはほとんど違いはなく、信仰を深めようとする点では目的は同じである。異なる点は、在家のお講はいずれも在家の門徒の家で行われる点で、特に月並お講と総お講は僧侶が参加せず、「おぼん様」（後述）といわれる人がそれを取り仕切る。詳しくは後で述べるが、住職の説教はなく、テープで聞く説教となる。

また、仏壇の用意、その他の準備を自分たちの手でするので、在家のお講の方が、参詣して説教を聞いていけばいい寺の行事に比べて積極性が感じられる。

Ⅲ 在 家 の お 講

下吉野の在家で行われているお講は月並お講、御書様お講、総お講の3つである。以下、それぞれのお講について、その内容を見ていく。

表-2 実見した在家のお講

講の種類	日 時	場 所	参詣人数
月 並 お 講	12月12日	K. K宅	22人 (20)
総 お 講	12月22日	A. N宅	33人 (24)

(日時は1994年、参詣人数のかっこ内は女性)

1. 月並お講

月並お講は毎月、東本願寺の第24代闍如上人の命日の前夜である12日と、浄土真宗の開祖親鸞上人の命日の前夜である27日の2回行われる。ただし11月27日は親鸞上人の命月であるので在家では行われず、寺において御正忌報恩講として行われる。毎月27日に行われることは以前から変わらないが、12日の方は、以前は6日に行われていたように、東本願寺の門首が変わるごとに変わる。お講の内容は12日、27日ともに同じである。

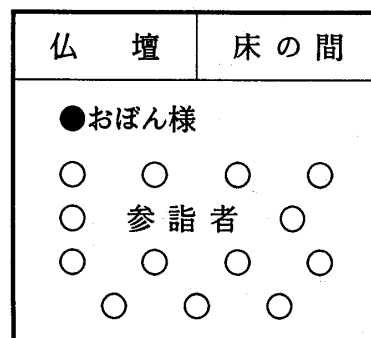
表-3 月並お講の進行

時 間	
19 : 30	勤行
20 : 05	説教 (テープ説教)
20 : 23	休憩
20 : 40	説教
20 : 50	恩徳讃 広大無辺の歌
21 : 00	終了

月並お講の始まりは、蓮如上人が北陸に浄土真宗を広めたときに遡る。その時、各地に道場が出来たが、当時は娯楽の場がなかったので、道場は娯楽の場として存在し、村人たちの意思の疎通をはかる場所だった。蓮如は亡くなるときに、「月2回は御直談 (教えの内容について話し合うこと) しなさい」と教えていったので、御直談が道場で行われるようになったのが月並お講の始まりである。

お講が行われる場所は、昔から順番が決められており、それに従って各家を回る。その順番は今では何を基準にしてなされ

図-1 月並お講での配置



(仏間)

たのかはわからない。地区内のほとんどの家を回るが、地区から離れた場所に住んでいる人や、新しく越してきた人などは、順番に入っていない。

1994年12月12日のお講は夜7時半から始まったが、その前に、お講が行われる場所、時間などが、区内放送によって流された。区内放送は有線が各家に取り付けられているため、全ての家に伝わることになる。

お講に参る人の服装は特に正装というのではなく、普段着である。男性は輪さげ（ワッペン）をしており、輪さげの色は寺に納めた金額によって異なる。

前述したように、月並お講を取りしきるのは住職ではなく、「おぼん様」と呼ばれる人である。おぼん様とは、正しくは道場役といい、お坊さんのかわりということでおぼん様といわれる。ただし、布教師ではないので、説教をすることは出来ない。おぼん様は道場を守る人であり、加賀地方に残っている。誰がおぼん様をするかということは、場所によって異なるが、下吉野では世襲制ではなく、常会などで選ばれた人になるわけだが、勤行なども中心となって行わなければならないため、仏教についてかなり知っている人が選ばれる。また、一度おぼん様になると、病気などで出来なくなる場合を除き、終生勤める。おぼん様の仕事は、月並お講や総お講を取り仕切るほか、葬式などでも寺の住職とともにお経をあげることもある。また道場があるところでは、道場の掃除や管理をするが、下吉野には道場がないためその必要はない。

お講はまず、勤行から始まった。仏壇の前におぼん様が位置する。勤行では、正信偈、和讃、御文章、領解文の順で拝読されたが、参詣者はみなそれらが書かれている本を持っており、それを見ながら声を出して拝読し、また左手には数珠を持っていた。本や数珠は寺に世話をしてもらったという。これは大人だけではなく子供も持っている。子供は寺で行われる日曜学級の際に本や数珠を使うからである。

説教はカセットテープによるテープ説教である。おぼん様が仏壇の横にデッキを置き、それをみんなで聞く。この日の説教テープは、滋賀のS先生のものであった。このテープはおぼん様が用意する。おぼん様は有名な先生のテープなどを電話で取り寄せたりして手に入れる。テープの内容は毎回違うということではなく、いい内容であれば、周期的に同じものを使うこともある。15、6年前まではテープではなく、御文章が分かりやすくなった本を御直談していたということだが、テープ説教のほうがいいということで、変わったらしい。

休憩時間には家の人からお茶やお菓子が振る舞われた。また、説教を聞かせてもらったお礼ということで1人100円から200円ぐらいが集められた。説教テープは、このお金の中から買う。

休憩後再び説教を聞き、説教が終わると皆で「恩徳讃」と「広大無辺の歌」を歌い、お講は終わる。

2. 御書様お講

御書様というのは本願時の門首からの便りのことであり、御消息ともいう。御消息は本願寺と

各寺、各寺とその門徒を結ぶものであり、その内容は、「もっと教えを広めよ」という激励だったり、お礼だったりもする。本願時より頂いた御消息を信仰のよりどころとし、それによって信仰を深めていったのが御書様お講の始まりであるが、その年代は蓮如が北陸に浄土真宗を広めた頃というだけで、詳しくははっきりしない。

御消息は木箱に納められていて、その木箱に共に納められている御書様お講順番表に従って1ヵ月ずつ各家を回る。御書様お講が行われるのは、その御消息がある家である。木箱の上には「御消息下吉野同行中」と書かれており、その中に巻物の形の御消息が入っている。御書様お講順番表は1986（昭和61）年のものである。各家では御消息を次の月の御書様お講の日まで置いておく。

御書様お講の行われる日にちは決まっていないため、毎月、お講が行われる家と寺の住職とが相談して都合のいい日に行われる。

御書様お講の内容は月並お講とほとんど変わらず、参詣者の数も同じぐらいであるが、御書様お講はおぼん様が行うのではなく、願慶寺の住職が来て説教を行うので、テープ説教ではない。また勤行では、御消息の拝読をする。

住職に対しては、以前はお講が行われる家の人は食事でもてなしたが、今はお茶とお菓子を出すぐらいである。

3. 総お講

総お講は12月22日と28日の2日間行われる。これは親鸞上人が、21日に病気で倒れてから1週間床に就き28日に亡くなったことに由来する。1週間のあいだ精進するということである。歴史は古く蓮如上人の時代に遡るが、詳しいことははっきりしない。月並お講と同じく、寺は関係なくおぼん様が中心となる。

御書様お講、月並お講よりも参詣者が多いのは、男性が多く来ているからであるが、それは、総お講が1年の総締めのお講であり、一家の主として参詣しなければならないという思いからである。

1994年12月22日、総お講は午前中からなので、10時位になると続々と人が集まってきたが、皆、手には、お盆の上に箸、茶碗、お碗、皿を置き、それを風呂敷で包んだものを持っていた。これは休憩のときの食事で使うものである。部屋に入るとその風呂敷を当番の人（後述）に預け、当番の人は誰のものか分かるように用意していた名札をつけて、部屋の隅のほうに置いておき、食事のときになったら、各自持っていくようになる。

勤行は、いつものお講とは異なり、1年に1回だけだからということで、おぼん様が呼びかけ

表-4 総お講の進行

時 間	
10 : 25	勤行
11 : 05	説教（テープ説教）
11 : 25	休憩 食事
12 : 40	勤行
12 : 50	説教
13 : 00	恩徳讃

て「仏説阿弥陀經」を余計に拝読した。説教は月並お講と同じくテープ説教である。

説教が一旦終了すると、みんなで輪になるように座る。これは食事をするためであるが、この食事を作るのは、当番にあたっている4人の人である。

当番というのは、4人1組で当たっていて、寺の行事があるときなどに手伝いをする。豆お講の時に各家から豆を集めるのも当番の仕事である。当番は1年ごとに変わっていくわけだが、この22日の総お講は1年間当番を勤めてきた人にとって最後の行事である。28日の総お講では新しく当番になった人が担当する。当番の順番は決められているが、他のお講の順番とは違い、また何を根拠としているのかは不明である。

当番の人は総お講の前に2人1組になって「おぶく米」といわれる米を1軒につき1合ずつ集める。それを使って、総お講の前夜から食事のおかず等を作る。以前は、総お講の食事は各家で作ったものを持ち寄っていたが、今は当番の人だけで作る。この日のおかずは蓮根の煮物、里芋の煮物、ぜんまいの煮物、ポテトサラダ、豆の煮物など、多種である。これらのおかずが、皿に分けられて、それを回しながらみんなで食べる。皆がそれぞれ持ち寄った茶碗等に当番の人によって、ご飯や、みそ汁を盛ってもらい、話をしながら味わって食べるのである。食べ終わったらそのまま風呂敷に包んで各自持って帰る。

同時に、「相続講金」といわれるものが集められた。これは仏教を相続させてもらうお礼ということで、本山の維持費に当てられ、寺を通して納められ、この相続講金の額によって、輪さげ(ワッペン)がもらえる。お金は門徒総代が集めるわけだが、総お講に参詣していない家の人は、後日門徒総代のところに持っていくことになっている。

食事のあとは勤行が始まった。午前中の勤行とは異なり、「三佛偈」の拝読である。説教は午前中の続きであった。説教が終わるといつものお講と同じように、「恩徳讃」と「廣大無辺の歌」を歌って終わった。

IV お わ り に

お講に参加してみて気づいたことは、参詣者がほとんど70歳代以降ということである。しかも参詣者の顔ぶれはいつもだいたい一緒である。彼らは、下吉野に生まれ、幼いころから親と一緒に参っていたとか、よそから嫁に来てから、姑に連れられて、参っていたという人が多く、お講に参詣するのが習慣になっていると思える。お講に参詣する理由を聞いてみると「参らなければならないような気がして参る」とか、「お話を聞こうと思うから参る」といった信仰上の答えが多かった。

しかしお講に参詣するのは、単に信仰を深めたいという理由だけではない。参詣者のなかには「昔はお姑さんとずっと顔を合わせていなければならなかったため、息抜きにお講に参った」という人もいり、また、情報交換の場としてもお講は機能している。地区の多くの人が一堂に会すと

いう場は、年に一度の地区の総会を除けば、お講のほかには見られない。しかも月3回はそういう場があるのである。「お講に行けばいろんな人とも会えるし」といって参詣する人がいるのは、このためであろう。

また在家のお講に参詣するのは、近所付き合いからという人もいる。「自分のところでお講があるときに参ってほしいから、そのために他の家のお講に参る」というのである。

多くの人の話を聞き、お講はただ「信仰を深める場」というだけの存在でないことを感じた。お講はいろんな意義を持って昔から存在しているのである。

今後お講はどうなっていくのであろうか。参詣者を見てもお年寄りばかりで、若い人の姿は見られない。若い人達には引き継がれないのではないかという心配があるが、参詣者に聞いてみると「お寺さんがあるかぎりお講はなくなるだろう」など、お講の存続について否定的な意見を言う人はいなかった。現在寺では2週間に1回、子供を対象とした寺小屋学級が行われており、また夏には本堂で合宿も行われている。多くの子供たちは宗教というものに触れる機会はない。しかし下吉野の子供たちは幼いころから浄土真宗に慣れ親しんでいるのである。そしてこの経験は大人になっても消えることなく、残るのである。このことから、お講はなくなると下吉野の人は思うのであろう。

心の拠り所であり、また、人とのふれあいの場であるお講のような行事は、今はほとんどなくなってきている。下吉野のこの伝統をいつまでも続けてほしいと思う。